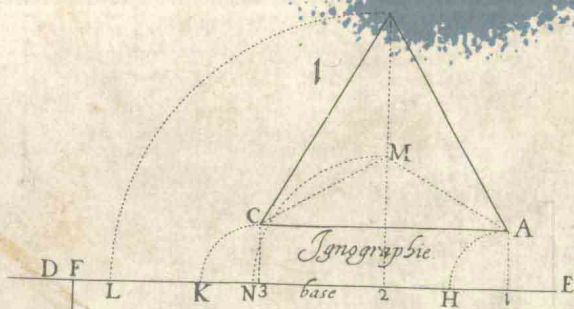




降水確率

mizuko masuda

増田みず子

降水確率

mizuko masuda

増田みず子

福武書店

© 1987 Mizuko Masuda

Printed in Japan

増田みず子
降水確率

*

1987 年 3 月 10 日第一刷印刷

1987 年 3 月 16 日第一刷発行

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店 〒102 東京都千代田区九段南 2-3-28

電話 東京 (03) 230-2131 振替 東京 6-105097

本文印刷所 図書印刷

カバー・表紙・扉印刷所 栗田印刷

製本所 加藤製本

定価 1200 円

ISBN 4-8288-2221-6 C 0093

NDC 914 194 282 p

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

降水確率
目次

コーン・フィールドの雉	221
生まれた場所	165
水の中の似顔絵	99
ぐる	49
降水確率	7

裝丁菊地信義

降水確率

増田みづ子作品集

降水確率

ほんものの雨は、なかなか降らなかった。

昔はもっと雨が多かった。降っていても、傘なしでちょっと走って父の煙草を買いに行けるくらいの、細かい霧のような雨が、木の陰や道端や裏山から絶えまなくしみだしてくるような感じで、延見子の日常を取りまいていた。よほど長時間外で遊んでいても、着ているものをぐっしょり漏らすほどの量は、降らなかった。家へ帰って、夕暮の電灯の下に息をはずませて立つと、髪やセーターの表面がかすかにきらきらと光るのが、玄関横の長い鏡に映るのだった。

洗濯物が乾かなくてこまる、と母はしょっちゅうこぼしていた。雨が降ろうが降るまいが、また、何を喋ろうが、母の、あたりはばからぬ地声は、誰かに怒りをぶつけている響きになった。

時がたてば、気候ですら変わってしまうというのに、人はどうして、別のものに変わってしまうことができないのだろう。

昔とちつとも変わらない。齡をとただけだ。性格ひとつ変えることができないままに、母も、自分も、老いてゆく。誰かから悲しみの涙ひとつ貰えるあてもなしに、独りぼっちで死んでいくのだろう。

雨の日の記憶が続く。

雨の日は、家族の誰もが不機嫌になった。ことに母が家にいる日、狭い家のなかに、一日中、母の小言の雨が降り続いた。母は、いつも疲れ、いつも怒っていた。

外に降る雨の方が、よほど静かだった。

家のなかでは、何の理由もないのに、弟がぐずりだし、とめどなく泣きわめいた。弟が泣くと、それに負けずに癪の強い妹が、当たり散らした。祖母はぶつぶつと独り言を言いつづけた。

延見子は、弟や妹をおどしたりすかしたりしてなだめながら、時には耳をふさいで、じっと眼を瞑っていたのを覚えている。

いつ止むともしれないあの豪雨を、どうやって子供の延見子にしのぐことができたのだろう。いつか慣れきって、そのうち止む、と高をくくっていたのだろうか。

小さな弟は、泣きつかれて眠ってしまふまで、決して泣きやまなかった。母が仕事先から帰ってきたときに、まだ弟が泣いていると、大変だった。家中が、屋根をぶち抜かれた

ように、どしゃ降りになる。翌日も雨はあがらない。

案外平気だった。かくべつ、よその子をうらやましがった覚えもないし、弟妹に意地悪く接した記憶もない。そういうものだと思っていた。

ただ、外に降る小糠雨の、本当には聞こえるはずのない、ざんざんと響くほどの激しい雨音に世界を閉ざされていたような気がする。何か考えようとしても、単調で激しいその音が、頭のなかにあるものを消してしまった。

あの頃の偽の雨音が、そっくりそのまま生まれ故郷に残っている。

二十年近くたった。東京へ出たときの十九だった延見子と、自分の年齢を思いだしたくない今の延見子と、そのどちらも、降ってもいない雨の音をわんわんと耳のなかに反響させて、何ひとつまとまったことを考えられないのは同じだ。

故郷に舞い戻って以来、四カ月になる。その間、雨らしい雨は降っていない。

なぜ、雨が降らなくなったのだろうか？

人に訊くと、雨は降っている、という。

「でも、昔はもっと降りませんでした？　こんなに空気が乾ききってはいませんでしたよね？」

延見子の問いに首をかしげてくれた人は、池田さんだ。二カ月前から、延見子は彼女の

アシスタントとして、その事務所へ毎日通っている。昼間、事務所は彼女と延見子の二人だけになる。

「雨ねえ。私は雨って嫌いな。降らないに越したことはないけど、ここの男たちはみんな農家の出身だから、大きな声ではいいないわね。でも、自分たちの仕事を考えれば、雨の日は大変よ、だから、みんな、本当は雨は嫌いなんじゃない？　へえ、そう、昔より降らなくなったかしらねえ」

彼女との会話はかみ合わない。彼女が一人で会話をしめくくってしまうのをきっかけに、延見子は元の姿勢に戻る。彼女と話するには、お互いに上半身をうしろへねじらなければならぬ。その位置に延見子の席を決めたのは彼女である。

延見子の席は、窓に面している。さしあたっての仕事は何もないから、殆ど一日中、埃まみれの窓ガラスを通して、広場の向うの国道を眺めて暮す。どしゃ降りの雨の幻聴は、多分、その国道をとぎれずに走り抜けていく車の音からの連想である。ザアザアという、降り止まない豪雨に似た響きが、森閑としたプレハブの事務所を、終日取り囲む。

「でも、この辺は静かでもいいでしょう。東京で暮したことのある人なら、よけいにそう感じるでしょうね。私はね、この土地を離れようと思ったことなんて、一度もないのよ。誰だって生まれた土地から離れずに暮せるなら、そうしたいに決まっているわ」

その口癖が出るたびに、延見子は、国道の騒音が気にならないのかと不思議になるが、

彼女は話相手がいいので、話の内容や延見子の意見にはあまり関心がないらしい。同様に、車の音にも注意が向かないのかもしれない。彼女が大切に思っているのは、生まれ故郷のこの土地が好きだという感覚と、現在の仕事とポストに対する満足感だけなのではないだろうか。

彼女は五十歳ほどの、やせた小柄な独身女性で、いまから十二年ほど前に事務所が設立されて以来の、管理責任者なのだそうだ。といっても事務員そのものも、設立以来、彼女一人きりなのだ。延見子は彼女のアシスタントとして給料を貰っているが、朝と夕方の人出入りの激しい時間帯を除けば、彼女の邪魔をしないことが唯一の仕事だといえる。邪魔にさえならなければ何をしていてもいいと、いわれている。邪魔というのは、彼女の仕事に手や口を出すことである。彼女の一日の仕事の量は、一人で充実感を味わいながら十分にこなせる程度のものであるらしい。十二年間かけて孤独に築きあげた心地よいペースを、臨時アルバイトふぜいの延見子にかき回されるのは確かに迷惑だろう。

この仕事は、母が知人を通じて見つけてきた。延見子としては、文句をいわれずにすむのなら、日がなのんびり文庫本など眺めていられる今の身分は大歓迎である。もっとも、長年の習性で、上役の視線や機嫌の裏を、見透かしてやりたい気持ちに駆られることがある。ことに勤め始めて間もない頃は、日中の五、六時間、何もしなくていいという言葉信じられずに、彼女の仕事を無理に手伝おうとして、かえってうるさがられてしまった。

徹底して、延見子の存在に、関心を示さなかった。

実をいうと、延見子も彼女に関心を持っていない。年配の独身女という人種の、底意地の悪さや詮索好きに、昔何度かこりた覚えがあるので、あらかじめ防衛線を張って、愛想よくふるまってみせただけである。それが無用と知ってからは、思うさまぼんやりと、静かな「雨の音」の幻想に身を浸していられる落ちつきが生まれてきた。彼女が、意地の悪さを見せてくれないのがいくぶん物足りない気はするが。

退屈のあまり、自分から敵意のようなものをかきたててみたくなることもある。

彼女のうちにちまちまと齡をとっていくのはたまらない。生まれてきたからには、一度でも人の頂点に身を置いてもみたい。生きたというしるしを、人の眼につくところへ刻みつけたい。

しかし、そんなことを考えてしまうことさえ、延見子には何やら気恥ずかしく、うしろめたく感じられる。

これまでの暮しぶりから、そんな力はないとわかりすぎるほどわかっているはずなのに、自分の気持がわからない。

一所懸命になればなるほど、体のなかに、血の流れを滞らせるような固まりが生じて、次第に大きく育って、息を詰まらせる。叫びたいとき、力を発揮したいときに、声や力の出口をふさぐものが、どこからか突然現われてくる。